

一〇、火の燃える炉と信仰——「たといそうでなくても……」

(変わらざる忠誠)

ダニエル書第三章——一八節(抜粋)

私たちは、変革——方法、立場、優先順位、視座、体制、方向の変革——の必要性についての聖書の主張に応答しようとする試みをなしてきた。このことは、すべては変革という名のゲームであって、すべては流動的で、今日の真理は明日の幻想以上の何物でもないという印象を与えかねない。

このような状況の中で私たちは、信頼できる不変なもの、安定していて確かなものを切望する。W・H・オーデンのクリスマス詩『当分の間は』の中で、ヨセフは身ごもった許嫁に関する穏やかならない知らせに直面して、神に向かって叫んでいる。「私が求める唯一のことは、大切なそして気品溢れる証明……御心は愛なりという証明です」。そして私たちは口には出さないにし

ても、この詩の言葉に回答が与えられることを、しばしば望むのである。

変化と衰退は私が見回すすべてのものの中にある、

変わることもなき方よ、私と共にいて下さい。

私たちには信頼できる方がおいでになり、私たちがささげる忠誠が変化を生み出すという保証を与えるような、「大切なそして気品溢れる証明」がもし何もないならば、私たちはどうなるであらうか。もし私たちが神に信頼できるなら、私たちは危険をおかすことができよう。しかしもし神ですらもはや信頼できないとしたら……。

古代の独裁政権下で生きていた三人の若いユダヤ人が直面したのは、まさに「神ですらもはや信頼できない」ような脅威であった。物語は私たちから遠く隔たった設定になっているが、少なくとも今朝の朝刊や今晚のテレビ・ニュースぐらいに現代的な問題を取り扱っている。それは甘い期待を覆して、私たちを新しい方向へと向かわせるものである。

聖書のテキスト ダニエル書第三章——一八節（抜粋）

ネブカデネザル王は一つの金の像を造った。その高さは六十キュビト、その幅は六キュビトで、彼はこれをバビロン州のドラの平野に立てた。そしてネブカデネザル王は、……諸州の官吏たちを召し集め、ネブカデネザル王の立てたこの像の落成式に臨ませようとした。……時に伝令者は大声に呼ばわって言った、「諸民、諸族、諸国語の者よ、あなたがたにこう命じられる。……もろもろの楽器の音を聞く時は、ひれ伏してネブカデネザル王の立てた金の像を拝まなければならない。だれでもひれ伏して拝まない者は、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる」と。……もろもろの楽器の音を聞くや、諸民、諸族、諸国語の者たちはみな、ひれ伏して、ネブカデネザル王の立てた金の像を拝んだ。

その時、あるカルデヤびとらが進みきて、ユダヤ人をあしざまに訴えた。すなわち彼らはネブカデネザル王に言った、「王よ、とこしえに生きながらえられますように。……ここにあなたが任命して、バビロン州の事務をつかさどらせられているユダヤ人シャデラク、メシャクおよびアベデネゴがおります。王よ、この人々はあなたを尊ばず、あなたの神々にも

仕えず、あなだの立てられた金の像をも拝もうとしません」。

そこでネブカデネザルは怒りかつ憤って、シャデラク、メシヤクおよびアベデネゴを連れてこいと命じたので、この人々を王の前に連れてきた。ネブカデネザルは彼らに言った、

「シャデラク、メシヤク、アベデネゴよ、あなたがたがわが神々に仕えず、またわたしの立てた金の像を拝まないとは、ほんとうなのか。あなたがたがもし、……もろもろの楽器の音を聞くときにひれ伏して、わたしが立てた像を、ただちに拝むならば、それでよろしい。しかし、拝むことをしないならば、ただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。いったい、どの神が、わたしの手からあなたがたを救うことができるか」。

シャデラク、メシヤクおよびアベデネゴは王に答えて言った、「ネブカデネザルよ、この事について、お答えする必要はありません。もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなだの神々に仕えず、またあなだの立てた金の像を拝みません」。

以上のような抜粋の仕方をしたことには、二つの理由がある。第一の、あまり重要でない理由

は、省略部分が退屈なことである。何が省かれているのか、それは重要な記事ではないのか、と考えられるかも知れない。しかしながら、すべてを元通りにすると、楽器や役人たちのリストの長ったらしい繰り返しになってしまう。それは物語の文体に彩りを添えるかも知れないが、話の中身にとっては重要でない。文体と中身の両方を十分に味わいたい人は章全体を大きな声で読んでみるとよい。何回か息を整える必要があるし、座って読むのが最善であろう。

第二の、より重要な理由は、テキストが途中で終るかたちになっていることである。それは一番興味深い部分にさしかかってきており、「次には何が起こるのか。彼らは生きのまま焼かれるのか、それとも逃げ出すのか」と、息をのんで自問するところであるが、ここに引用している限りでは、テキストは私たちの期待に答えてくれない。途中で終わったかたちになっていることには理由があつて、それは学んでゆく中ではっきりしてくるであろう。

ダニエル書がどんな意味を後代に持つようになったにしても、もともと「当時のための冊子」であつた。それは、アンティオコス・エピファネス（紀元前一六八年頃）の恐るべき統治時代に、ユダヤ人の信仰と抵抗を強化する目的を持っていた。彼は「現人神」であることを主張し、エルサレムの神殿にゼウスの祭壇を設けた支配者であつた。この物語はネブカデネザル王の時代の初期に設定されているが、それはユダヤ人の読者たちが当時蒙っていた苦難について勘づかれ

ない仕方では語りかける方法だったのである。暗号コード（「ネブカデネザル」のところを「アンティオコス・エピファネス」と解説する）を知っていた人は誰でも、この物語が新聞やテレビ・ニュースぐらい新鮮であることが分かったであろう。話の筋は平明で、登場人物は少々型にはまっている（権力に飢えた王、卑屈な臣下、正しい生き方をするユダヤ人の青年たち）としても、はつきりと描かれていて、その意味していることは驚くべきことである。

ネブカデネザルは不安を感じていた。貢物は本年度の過去三ヶ月間に七・三パーセントも下落し、遠隔地域ではいくつか反乱が起きていた。『バビロニアン・レジスター』紙の社説は極めてやんわりと王の権力が衰退気味であることをほのめかしていたが、それが再び社説欄に現れる心配はなくなった。朝刊が町に出て一時間もたたないうちに編集長を始末してしまったからである。しかしそれでも……。

そこで王は、自分自身を中心にして「国を再統一する」ための式典を考え出した。周囲数マイル先からも見えるような巨大な金の像が公園に立てられた。すべての人が奉獻式に出席するだけでなく、ひれ伏して金の像を拝むことをも命じられた。その像はネブカデネザルをかたどったものか、それとも神か。そんな違いは学問的なことでしかない。像が何を象徴しているように、それに頭を下げることによって、国民は実際にはネブカデネザルに膝を屈めるのであり、その行為に

よって、「国王万歳、私たちは何でもあなたの命令に従います」と言っているのである。

勿論、国王の命令に従うと、いいこともあった。なぜならば感嘆すべきほどの明瞭さで一定の条件があらかじめ設定されていたからである。王は臣下に対して公平であるべく、選択の余地を与える。偶像を拝むことを選ぶこともできるし（この場合、みな無事である）、拝まないことを選ぶこともできる（この場合、誰も無事ではなく、火の燃える炉の中に投げ込まれる）というのである。ほとんどすべての臣下が、ここに挙げた二つの選択肢の中から自由意志に基づいて王の要求を尊重する選択をするとしたら、それは王にとって喜ばしい材料となる。堅い忠誠心が臣下の間に広まれば、ひと安心できるというものである。

「ほとんどすべての臣下」は服従したが、全員ではなかった。なぜならば王の知らないところで命令に従わない三人の男、すなわち、いつまでも不服従を貫き通す三人のユダヤ人がいたからである。

王はどのようにしてこのことを知るに至ったか。反体制派や「法と秩序」に対する脅威を発見するためにどの政府もやっている、密告者を潜り込ませるという手口を使ったのである。

敵愾心を抱いた幾人かの本職の占い師であるカルデヤ人が、権力の中核近くで厄介なことが起きていることを密告していた。最も信頼を置いていた三人の役人シャデラク、メシヤク、アベデ

ネゴはつい先月に国家安全人物認定調査を更新したばかりであるのに、ネブカデネザルの神々に仕えることを拒否したばかりか、彼が立てた金の像も拝まないというのである。

三人は怒り狂った王の前に呼び出されたが、王は話し合う余地はないと心に決めていた。強圧的に出て、いったい誰が偉いのかを示さなければならなかった。彼はじかに切り出した。直ちに跪いて金の像を拜むか、さもなくば火の燃える炉に三人とも投げ込んでしまおうかというのである。それからネブカデネザルは自分が勝ったと確信して、彼らをもてあそび、神学論議を吹きかける。「いったい、どの神が、わたしの手からあなたがたを救うことができるか」。

シャデラク、メシヤク、アベデネゴは、不服従が険しい道のことであることに当初から気づいていたに違いない。彼らは自分たちの生命の決定権を握っている王に対してですら神学論議を交わす備えができていた。彼らは明確に三つの点を主張しているが、後の方ほど重要な点である。

一 私たちは実際あなたの質問に答える必要を感じてはおりません。

二 しかしながら、王よ、私たちの仕えている神がその火の燃える炉からだけではなく、あなたの手からも私たちを救い出すことができることを、ご承知ください。

彼らはおよそ考え得る限りの率直な返事をしたのであるが、火の燃える炉の扉の方へ連れられてゆく前に、さらにこう付け加えている。

三 「たといそうでなくても……」（たとい私たちの神が火の燃える炉からもまたあなたの手からも私たちを救い出されなくても）「わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」。

これは、ネブカデネザルや宮廷の他の誰も（特にカルデヤ人の密告者たち）が想像し得た以上に率直な答であつた。彼らはいかなる事態になろうとも、自分たちの神に対して忠実であり続けるであらうし、事態は数秒のうちに激変しそうな気配であつた。しかし変わりつつある状況下で彼らは変わらざる忠誠を選択したのである。

抜粋した物語はここで終ることになる。

しかし話を途中で終るのは実際適切なことではない。文字通り、物語のテンポは加速度を増し、熱気を帯びた展開になってきている。王は炉の温度を平常の七倍に上げるように命令する。そして断固たる決意で、シャデラク、メシヤク、アベデネゴを服のまま縛り上げて、炉の中に投げ込

むように命令している。皮肉なタッチで書かれてはいるが、今や炉は激しく熱しており、三人を投げ込んだ男たち自身が炎に飲み込まれてしまったというのである。

そしてここから先は、『リーダーズ・ダイジェスト』誌にほとんどそのまま載せてもよいような筋書きになっている。シャデラク、メシヤク、アベデネゴの髪の毛一本焦げないのである。「神の子」のような天よりの来訪者、すなわち四人目の人物が現れて、炎の中を彼らと一緒に歩いてゐるのを王は目撃する。(明らかにネブカデネザルには、敵が火あぶりになるのを眺める快感を味わえるような耐熱視き窓があったのであろう。)これでは火あぶりにならないので、当惑した王は炉から出てくるように彼らに命令する。それは彼らが従いたいと思つた最初の国王命令であつた。

王は自分が見たことで納得した。彼らの神は本当に彼らを救い出した。そこでネブカデネザルは自分の神学論議にまだ望みをつなぎながら、彼らの神を肯定しないまでも、シャデラク、メシヤク、アベデネゴの神をのしる者があれば誰でも——火の燃える炉はもはや確実な抑止力ではなくなったので、そこに投げ込む代わりに——その身を切り裂くという布告を出した。そして話は直ちに結末に至つてゐる。シャデラク、メシヤク、アベデネゴは政府から安全人物として再認定され、仕事も取り戻し、昇給も勝ち取り、健康保険も彼らが置かれていた特殊事情を考慮し

10. 火の燃える炉と信仰——「たといそうでなくても……」

て医療補償の範囲は無制限となった。

結末はハリウッド映画のようになっていて、私たちとしてはあまり信じられない。なぜならば人生はそんな筋書き通りにいかないということを私たちは知っているからである。しかし、ハリウッド映画の結末は、特別な理由があつてここに挙げられている。シャデラク、メシャク、アベデネゴが明快に宣言（「わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拜みません」）した時、彼らに、ハリウッド的結末が訪れる保証はなかった。神はあらかじめ保証を与えては下さらないのである。彼らは、「たといそうでなくても……」というまさにその表現をすることによって、次のようなことを言っている。「自分たちが生き残ることになるかどうかは分からない。私たちは燃える炉から救ってもらい駆引き材料として神への信仰を唱えているのではない。生き残るかどうかの問題なのではない。問題は神に対して忠実であり続けることなのだ」。

話の結末は面白いが、それは脇に置いておくことができよう。物語の核心は、「たといそうでなくても……」という言葉にある。

考察と議論のための課題

私たちは聖書的神信仰に関する最も根本的な事柄の核心部分を前にしている。それは信頼であり、反対の証拠しかないにもかかわらず信頼することであり、結果を恐れないで信頼することである。幸いなことには、神に対するそのような「変わらざる忠誠」は、聖書の登場人物だけに限られたことではない。

1 さてその頃、アドルフ王は鉤十字と呼ばれた偶像を造った。そして彼は、党員、政府の指導者、軍隊の将校と下士官、教員、ビジネスマン、教会員のすべてを召集して彼らに言った。

「この像と私本人がわが国の新しい時代を象徴している。あなた方は互いに人を迎える時、『ハイル、ヒットラー』と言わなければならない。そして互いに別れる時にも、『ハイル、ヒットラー』と言わなければならない。すべての家庭、すべての教会、すべての職場、すべての教室で、あなたがたは鉤十字と私の写真を掲示し、いかなる犠牲をも、すなわち生命すらもささげる覚悟ができていなければならない。そして、その通りにしない者は誰でも、火の燃える炉あるいはガス室

に送り込まれるであらう」。

こうして国民は命じられたように行ない、彼が立てた像を拜んだが、見よ、その通りにしなかった少数の人々は火の燃える炉とガス室に送り込まれていった。

しかし密告者たちが彼のもとへやってきて、「ハイル、ヒットラー。総統閣下、あなたの命令に従って拜まない者たちがいます」、と告げるような事態が生じた。

すると彼は、「その者たちは誰か」と言った。彼らは答えた、「ユダヤ人たちです、総統閣下。

彼らは、もっとひどいことには、あなたとは違う神を拜むことを主張しています」。

ヒットラーは激怒して言った、「われわれはすでにこの者たちのことは知っている。彼らは生命を汚染し、わが民族の血統を劣等化している。彼らは他の神を拜んでわれわれの神に頭を下げようとしないがゆえに、また彼らは今までずっと地上の悪疫であつたがゆえに、彼ら全員を燃える炉とガス室に送り込んで、地上から永久に抹殺してしまおう」。そして彼は特にユダヤ人を全滅させるために新しい炉とガス室の建造を命令した。彼は叫んだ、「彼らの神が火の燃える炉とガス室から彼らを救い出すかどうか見てやろう」。

そして、すべては彼が命じたようになって、ユダヤ人は燃える炉とガス室に押し込まれた。最初は一度に五〇人、それから一日に千人、それから一日に一万人となつて、百万人のユダヤ人が

殺され、それが二百万人となり、遂には六百万人となった。

ユダヤ人たちが燃える炉とガス室に入って行った時、信仰を持って入っていった者もいれば、どんなことになるのか最後の最後まで信じられない者もいた。しかし多くの者は「シエマ・イスラエル」を口ずさみながら入って行った。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である」。それは生ける神に対する彼らの古代の信仰告白であった。彼らが唱えていたことは、「わたしたちの神、主は、火の燃える炉とガス室から、わたしたちを救い出すことができます。たといそうでなくても、ヒットラーよ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた像を拝みません」ということであった。

しかしこの時には、誰も救い出されなかった。

そして六百万回に及んで誰も救い出されなかった。

そして四〇年後、ユダヤ人たちは今なお「シエマ・イスラエル」を口ずさんでいる……。

これは驚きと涙と問いと憧れと激しい希望の源である。

2 エルサルバドルの男性で、司祭になり、（穏健で融和的であると思われたために）最終的に大司教になった人がいる。彼は、臨時政府（軍事独裁政権）が農民たちだけに對してでなく政

治的経済的変革のために農民の組織化を助けていた司祭たちに対しても拷問と虐殺を加えていた地で平和を守ることを望んだ。臨時政府は平常の年でも一万人にのぼる一般市民を殺害していた。

そこでオスカー・エルヌルフ・ロメロという名前のこの大司教は、臨時政府を非難し始めた。

彼は（臨時政府を支援していた）合衆国大統領に書簡を送り、合衆国が殺人政權にこれ以上武器供与をしないように要請した。（武器は今なお現在に至るまで送り込まれている。）彼はサルバドル軍兵士に対しては、同胞を殺すように命令された時には、その命令に従わないようにと求めた。このような、またこれ以外の方法で、彼はもはや臨時政府に膝を屈めたりその神々を拜んだりする意志がないことを示した。その一つの神とは「いかなる犠牲を払っても法と秩序を守る」ということであり、殺人を意味していた。その一つの神とは横暴な権力のことであり、拷問を意味していた。その一つの神とは一握りの人々の富のことであり、大多数の人々の飢餓を意味していた。

しかしエルサルバドルのネブカデネザルはロメロ大司教を火の燃える炉へと連れて行く代わりに、彼が臨時政府の神々ではない神を礼拝するミサを行なう時まで待った。そして彼を銃で撃ち、祭壇の前には弾丸に見舞われた彼の体が倒れた。

彼の物語は現在の物語として語り継がれている。なぜならばオスカー・エルヌルフ・ロメロ

は、彼自身が予言したように、サルバドルの民衆の心の中によみがえったからである。

3 ラテン・アメリカの別の地域には、マリアというとてもキリスト教的な名前を持った、キリスト者ではない一六歳の少女がいて、「基礎共同体 (base community)」に関係するようになった。それは大陸全土に何千もの同じようなグループがあるうちの一つであり、祈りや聖書研究や社会的行動のために集まっていたが、「社会的行動」に重点が置かれていたために、彼らの生命はいつも危険にさらされていた。しばらくたつとマリアは信仰告白をして洗礼を受けたいと思うようになった。しかし司祭は反対であった。彼は、マリアがもっと大人になるまで、教会員になるのをもう少し待った方がよいかも知れないと考えていた。「自分の信仰のために死ぬ準備がもうすでにできているかどうかよくわからないから」と司祭は言った。

一八歳の誕生日を迎えるまでに、マリアは信仰を告白して洗礼を受けた。そして信仰のために死んでいった。

このような話は感動的であるが、実存的にも地理的にも私たちから遠くかけ離れているように見える。私たちはそのようなせっぱ詰まった状況の中で生活していない。誰も私たちに跪いて偶

像を拝むようにとは言っていない。

しかし、もしかして私たちも同じ状況にあるのだろうか。ここで私たちの国にとってもっと身近な例を三つ適当に選んでみよう。

● 私たちの軍隊は他国を侵略することによって条約を破り、以前調印した国際協定を無視している。国際連合が一〇九対八で、私たちの違法行為に対して「遺憾の意」を表明した時、大統領であり全軍最高司令長官であった人が、他の全世界のほとんど満場一致のこの非難決議すら「私の朝食をいささかも乱しはしなかった」と述べたりしている。

● ある報告によれば、「高度の機密情報に近づくすべての政府職員に対し、その生涯にわたって、彼らが一般読者向けに書く新聞記事や書物を政府検閲のために提出する」ことを要求する法律が制定された、ということである。あるニュース解説者は、その目的は「機密情報の不法漏洩を防ぐことではあるが、結果はそれ以上に及びそうである。それは、最有識者が発する批判を、権力の側が手間取らせたり封じ込めたりする強力な新兵器となるであろう」と述べている (Floyd Abrams, "The New Effort to Control Information," *The New York Times Magazine*,

Sept 25, 1983, p. 22)

●一八歳のある少年は良心的に徴兵登録には応じられないと感じているが、懲役五年の刑は免れそうにない。

次のような権力者のあり方に対して、あなたがたはどのような態度をとるのであろうか。それは人々を燃える炉やガス室に送り込むような例ではないけれども、最終的にはそこへ至る道への第一歩である。「われわれ権力には反対しないこと。もし反対すれば、われわれはあなたがたを（上記の例が示しているように）無視するか、黙らせるか、刑務所に送り込むかする。そして幸運を期待してはならない。なぜならば、『国家安全』のために必要とあればわれわれはさらに強硬な手段に移行する準備ができているからである」。

戦争の時、私たちは「塹壕の中に無神論者はいない」といったようなことを耳にしたが、もっと正確に言うと、戦争の時でも平和な時でも、確かに「無神論者はいない」のである。ダニエルの物語は、神を信じた人と信じなかった人についての話ではない。それは違った種類の神を信じ

ていた人々についての話である。

私たちのほとんどはおそらく多神教徒であり、いくつかの神々を信じている。その神々は、私たちが言葉で忠誠を誓っている神であったり、その他の価値ある物、事業、忠誠心、人間でありたりするが、私たちはそれらに対して無批判的忠誠を惜しみなくささげようとしていたりする。そして、それら以外の一切のものを否定しようとしていたりする可能性もある。

忠誠をささげることが私たちに執拗に要求してくると思える神々のリストとしては以下のようなことを挙げることができるかも知れない。

組織に従うこと

ナンバー・ワンになること（学校、職場、政治、世界の中で、あるいは三振ではなく盗塁教で）

ガール・フレンドまたはボーイ・フレンドを獲得すること

責任ある地位につくこと（企業、政党、教育委員会、労働組合、政府の中で）

ソ連を押さえ込むこと

もし私たちが第三世界の友人たちに尋ねて、私たちが口では自分たちの究極的忠誠心がどこそこにあると言っているにしても実際にはどんな神を拝んでいるかを教えてくれるように言ったら、そのリストは次のようになるかも知れない。

何が何でも合衆国をナンバー・ワンの地位に保つこと

銃や戦車や核兵器の点で他のどの国よりも絶対的優位に立つこと

「脅威」となる可能性のある国々を誰に統治させるべきかの決定権を自分たちが持っていること

他国あるいは他国民を犠牲にしてまでも「良い暮らし」をする権利を自分たちが持っていること

誰も調整しようとしないう経済体制を維持すること

このようなリストは個人としても国としても心地よいことではないかも知れないが、正直に考えると、それらが実際私たちの文化の中で多くの人々に影響を与える「神々」となっていることを、時々認めることができる。

その時点において、このような神々を拝むことに何らかの気まずさを感じる人々のためには、次のような問いが置かれている。「私たちの国においてそのような神々の権力が非常に強い時、私たちはシャデラク、メシャク、アベデネゴの神、アブラハム、サラ、イエス、ユダヤ人、羅馬大司教、マリアの神を、どのような覚悟を持って主張することができるのであるうか」。このような信仰的行為に確証や保証は何もなく、非常に気の遠くなることのように見える。勝つチャンスは（時には六百万対〇で）特に高いとは言えない。神は他の神々の権力から私たちを救い出すことができるかも知れないが、もしかすると、できないかも知れない……。

もし私たちが本気であれば、このジレンマとの闘いは生涯続くであろう。この時点で結論として私たちになすことができることは、徐々に小さなことから始めるしかないということである。私たちは神に対する信仰が危険を伴うものであるとしても、他のどの神々も決して保証付きなものではないということを頭にとどめておくことから出発することができる。選択は決して危険なことと確かなことの間での選択ではない。それは常に危険と危険の間での選択である。ただでは何も貰えないこと以上に確かなことは何もないのである。

私たちはまた、神に対する信仰が危険を伴うものであるにしても、そこには一貫性があることを頭に入れておくべきである。なぜならば私たちが論じている神は危険をおかす神だからである。

その時点において、このような神々を拜むことに何らかの気まずさを感じる人々のためには、次のような問いが置かれている。「私たちの国においてそのような神々の権力が非常に強い時、私たちはシャデラク、メシヤク、アベデネゴの神、アブラハム、サラ、イエス、ユダヤ人、羅馬大司教、マリアの神を、どのような覚悟を持って主張することができるのであるか」。このような信仰的行為に確証や保証は何もなく、非常に気の遠くなることのように見える。勝つチャンスは（時には六百万対〇で）特に高いとは言えない。神は他の神々の権力から私たちを救い出すことができるかも知れないが、もしかすると、できないかも知れない……。

もし私たちが本気であれば、このジレンマとの闘いは生涯続くであろう。この時点で結論として私たちにすることができるとは、徐々に小さなことから始めるしかないということである。私たちは神に対する信仰が危険を伴うものであるとしても、他のどの神々も決して保証付きなものではないということを頭にとどめておくことから出発することができ、選択は決して危険なことと確かなことの間での選択ではない。それは常に危険と危険の間での選択である。ただでは何も貰えないこと以上に確かなことは何もないのである。

私たちはまた、神に対する信仰が危険を伴うものであるにしても、そこには一貫性があることを頭に入れておくべきである。なぜならば私たちが論じている神は危険をおかす神だからである。

アブラハム、イサク、ヤコブの神、サラ、レア、ラケルの神は、常に現実の真つ只中において、貧しい人々の側に立ち、奴隷の集団を顧み、そして想像できる限り最も危険かつありえない仕方です——キリスト教的表現を用いると——受肉された。すなわち一般の人々がユダヤ人をあまり好まず、権力者に至っては全く嫌っていたような時代（他の時代と同様）に生きた第一世紀のユダヤ人となられたのである。それゆえに、もし神を肯定することが困難になったとしても、私たちは、困難という言葉は神の別名であり、私たちが困難の真つ只中にいる時に、神は遥かかなたの天において中立を守っておられるのではなく、私たちと共においでになるのだということを確信していることができるのである。

そして、もし私たちがすべての中で最も難しい方向転換——中産階級的価値観と上昇志向と豪華な隠退生活設計といった神々から訣別すること——を開始することができるとしたら、そして試験的で恐る恐るではあったとしても、もし虐げられている人々と共に考え、そして彼らのために行動することがどんなことであるかを探求することができるとしたら、すべてのことの中で最も「意外な知らせ」、すなわち神は私たちに先んじてそこにおいてになっていることをその時発見することになるかも知れない。